日本佛教史の庶民性序説

東大寺勸進僧行基・重源傳考

藤原弘道

永遠に淨く美しかるべき世界えのあこがれは、貴族も庶民も均しくもつ心情である。王朝藝術の粹として殘る鳳凰堂、法界寺、淨琉璃寺、中尊寺等にみる、最高峰の佛教藝術の如きも、平安朝人の永遠なるものえの思慕であつた。心から讃美を惜まない淨土である。然しこの尊い文化財も貴族と權勢の專有物であつて、一般民衆の享受することのできなかつたものではなかつたらうか。貴族文化の指導性には、その政治的地位のもつ支配力をみのがすことはできない。しかもその支配力の中には必ず强制性を含むもので、强制性のもとにはいかに善美なものにも民衆の心からなる隨喜は湧かない。人類全般の解脫と救濟とが佛教本來のすがたであるとすれば、貴族佛教必ずしも佛教の眞精神に添うものとは云い難い。平安貴族佛教の墮落がそこにある。この行詰りを打開し、庶民的性格を帶びたものが、人々の歸向を受くべきは當然である。市聖と呼ばれる空也の念佛教化、一人の念佛は一切人に融通し、一切人の念佛は一人に融通すると言う融通念佛の理論と實踐が喜ばれ、日本佛教史上の偉彩、法然、親鸞、日蓮等の完全なる庶民佛教が展開されるに至つた。

日本佛教史に於ける貴族性と庶民性とは、各々その立場を異にしているが、庶民性こそ深く國民生活に浸潤して、そ

の生活を豊富にした。從來の佛教史研究は貴族中心にすゝめられてきたが、近時庶民佛教が研究の主眼とされる傾向に變つてきた。

さて國家的佛教といわれる東大寺大佛を廻る重要な人物、即ち創建時代の勸進僧行基と再建時代の勸進僧重源、一は貴族佛教の興隆期に、一は庶民佛教の興隆期に出現し、何れも民衆の支持を得て大佛建立の大事業を完成したのであるが、それらの庶民性について考究したい。

◇

行基は古來傳説的なものを多く持つている。東大寺は聖武天皇の發願で、行基菩薩の勸進、菩提僧正の開眼、良辨僧正の別當で建立したもので、之を四聖建立の伽藍といつているが、天皇は救世觀世音上宮太子の再誕、行基は文殊の應現、菩提は普賢の化身、良辨は彌勒の垂化とも傳えられてきた（傳通緣起）。藥師寺の景戒は人も知る行基禮讃の一人でその著日本善惡現報靈異記には、行基を文殊師利菩薩と稱讃した。又東大寺に關係深い名僧、玄昉、良辨、菩提、鑑眞等には全然觸れていないにもかゝわらず、行基には頗る多くの記事を與えている。西方願生者智光が行基の聲名を嫉んで墮獄し、再び蘇生したという、智光對行基の説話が、行基信奉者を集めたことは事實であらう。更にこれが佛教に關心をもつ人の多かつた平安朝の人々の腦裡に如何に反映したらうか。今昔物語に五大山文殊の物語を產み、行基物語をいよ〳〵豊富にした。

さて行基の民衆に對する接觸は、はじめ、養老元年四月詔を以て、「弟子等街衢に零疊し妄に罪福を説き、朋黨を合せ構へ、指臂を焚剝し、歷門假説して强いて餘物を乞ひ、聖道を詐稱して百姓を妖惑し、道俗擾亂して、四民業を棄つ。進んで釋教に違ひ、退いて法令を犯す」（續日本紀七）とまで云われた。前半生は誤解も多く、反對者も出たらしい。にもかゝわらず、天平三年八月には、行基に隨逐せる優婆塞優婆夷の如法に修行するもの男六十以上、女五十五

以上は皆出家することを許された。（續日本紀十一）この推移は不思議に思はれるところである。天平十五年には、大佛勸進のため弟子等を率いて、本格的に民衆に勸進した。（續紀十五）ところが世人の反響は頗る良く、淨財勸進の目的は完全に達せられたこととて、天平十七年正月には「躍大僧正に敍せられた。（續紀十六）全く異例の昇進といはねばならぬ。かくて朝野の尊信を一身にあつめたのである。大佛勸進の成功は行基の德風の然らしむるところ民衆との完全なる直結によるもので、彼の性格を續紀には「眞粹天挺、德範風彰」と記している。一面民衆もまた行基を通じて、大佛建立に對する理解と讃仰の極、淨財喜捨を惜まなかつたといはねばならぬ。更に續紀には、彼の遷化の傳に、

周二遊都鄙一教二化衆生一、通俗慕レ化追從者、動以レ千數。所レ行之處開二和尙來一、巷無二居人一、爭來禮拜。隨レ器誘導、咸趣二干善一。（續紀十七、天平勝寶元年二月丁酉條）

とまで稱讃せられたのも遇然ではない。然も彼の民衆性は東大寺勸進にとゞまらず、幾多の社會福祉施設として輝やかしい足跡を殘した。

「留止之處皆建二道場一。其畿內凡四十九處。諸道亦往々而在」。行基四十九院創建說は右の正史の外、昆陽寺の古鐘銘等にもある確實な事蹟であるが、「弟子相繼皆守二遺法一、至レ今住持」。（續紀、天平勝寶元年二月の條つゞき）などのことから行基創建と稱する寺々が、畿內各地にいかに多いかは思い半にすぎるものがある。

佛敎は彼岸の敎を說くところから架橋を一の功德と考え、古來橋と寺との關係も特に深い。遠くは道昭、道登の宇治橋造立に因んで、橋寺常光寺が建ち、行基の泉川泉橋に泉橋寺が建つたなど寺と橋との相互關係に社會福利施設的意義を認めることができる。泉橋は現に京都府木津町と上狛町をつなぐ木津川に架けたもの、橋畔の泉橋寺は行基四十九院の一である。三代實錄貞觀十八年三月辛巳の條に、この橋が河流の急なため破損しやすく、大船二艘、小船一艘を買得して寺に施入し、人馬の濟渡に備うと記している。一般に僧徒の架橋はこれを勸進橋と呼んで、橋の渡り初めには橋供

養なる祈願佛事が行はれた。（日本佛教史學、拙稿、交通文化史上に於ける佛教徒の貢献參照）

行基の架橋については、續紀に「親率二弟子等一、於二諸要塞處一造レ橋築レ陂。聞見所レ及咸來加レ功。不日而成。百姓至レ今蒙二其利一」。（遷化の條）と、又靈異記には「時行基菩薩有二難波一、令レ渡レ橋、堀レ江造二船津一」とある如く、交通不便の時に當つて、官營を以てしても、なほよくなし得なかつたところ、行基の力によつて之が實現され、一般庶民が感謝したことが察せられる。

行基年譜によると、行基の築造した社會事業、殊に土木事業について、その年代と場所を、一々詳細に記している。今は略しておくが、大要、直道一所、池十五所、溝七所、樋三所、船息二所、堀四所等に及んでいる。陸上水上を問はず、かくの如き大事業が一行基の主唱によつてなしとげられたことは、民衆の絶大なる協力によるものといはねばならぬ。されば「靈異神驗觸レ類而多。時人號曰二行基菩薩一」。という如く、時人は行基を人間以上の存在であると感得したに違いない。

◇

行基を去る四百年、東大寺再建を勸進した俊乘房重源は、天平の行基に比すべき大業を完成した。

事實治承の大佛炎上は奈良佛教の傳統を空しく破壞した。之を復興し、大平大伽藍の再現は、創建にも劣らぬ大業である。如何に、皇室や幕府の外護があつても、民衆の絶大なる協力がなくては、とうてい不可能の大事業である。されば之が指導的役割を演ずる勸進職の選擇こそ最も重要であらう。大願成就のために強固な信念と熱意の人であり、それに對する民衆の支持がなければならない。法然上人の四十八卷傳によると、源空がその選に當つたが辭退したので、その門下から適當な人ということで、醍醐の俊乘房重源が擧げられたといつている。源平盛衰記にも同じく源空の推擧によつて之が重職についたと記している。とにかく東大寺再興のために一生を捧げた重源は、「支度第一俊乘房」（四十八

卷傳　四十七）といわれた程賢明な人であり、深い信條と強い意志の持主であつた。淨土敎の傳播に努め、東大寺勸進と念佛の興行を續けながら行つた。壽永元曆の源平戰歿者を弔うために東大寺より始めて七日の大念佛を修し、建久二年大佛殿工事半に、源空を請じて、三論法相の學徒に念佛の法を說いた。卽ち四十八卷傳の三十に

壽永元曆のころ、源平の亂によりて、命を都鄙にうしなふもの、其數をしらず、こゝに俊乘房無緣の慈悲をたれて、かの後世のくるしみを救はむために、興福寺東大寺より始て、道俗貴賤をすゝめて、七日の大念佛を修しけるに、その頃までは、人いまだ念佛のいみじき事をしらずして、勸めにかなふものすくなければ、俊乘房この事を歎て、人の信を勸めんがために、建久の頃、上人を請じたてまつり、大佛殿のいまだ半作なりける軒の下にて、入唐の時渡し奉れる觀經の曼陀羅、ならびに淨土五祖の影を供養し、又淨土の三部經を講ぜさせ奉りけるに、南都三論法相の碩學おほくあつまりける中に、大衆二百餘人をの〳〵はだに腹卷を著して、高座のきはになみ居て、自宗の義を問かけて、誤謬あらば恥辱をあたへんと、支度したりけるが、上人まず三論法相の深義をのべ、次に淨土一宗の祕蹟をこまやかに釋し給て、末代の凡夫出離の要法は口稱念佛にしくなし、もし念佛をそしらんともがらは、無間地獄に墜て、八万大劫苦を受べきよし、觀佛經の說にまかせて、說給ければ、二百餘人の大衆よりはじめて隨喜渴仰きはまりなし。

と大衆に面目を施している。（九卷傳、琳阿本法然上人傳繪詞、拾遺古德傳等）

建久六年三月十二日大佛殿落慶の日に、重源は大和尙位の號を賜つた。一代の業蹟は南無阿彌陀佛作善集に詳しい。この書は重源八十三才の時の記錄で、八十六才を以て入寂しているから晩年の自敍傳ともいうべきものであらう。それによると次の別所を建て、民衆と共に念佛興隆につとめた。

東大寺別所（淨土堂）

高野の新別所（專修往生院）

播磨の別所（淨土寺）
周防の阿彌陀寺
攝津渡邊の別所（淨土堂）
伊賀の別所（新大佛寺）
備中の別所（淨土堂）

以上の七箇所に及ぶ諸堂を建立、幾十百体の新造佛像を安置した。それらは何れも淨土堂、常行堂で、阿彌陀佛三尊を安置したことは彼の淨土教信仰を物語るもので、民衆の協力に依つて建立した寺で、民衆と共に念佛を專修したところに時代教學の方向を示している。四十八卷傳（四十五）に「上人の勸化にしたがいて、念佛を信仰のあまり、かの故山上の醍醐に、無常臨時の念佛をすゝめて、末代の恒規とし、そのほか七箇所に、不斷念佛を興隆せられき。東大寺の念佛堂、高野山の新別所等これなり。」と云ふ如く、七箇所の別所以外に醍醐を入れているが、南無阿彌陀佛作善集には上醍醐寺の造立に關しては記しているが、別所のことには及んでいない。とにかく東大寺以外の造營にも及んでいる功を認めねばならぬ。九條兼實は重源を評して「躰實に飾詞無く、尤も貴敬すべきに足る」（玉葉三八、壽永二年正月廿四日條）と評している如く、朝野の尊信を受けたことが察せられる。

寺塔建立の外、橋を架け、道路を開き、池を堀つて民衆のためにつくした重源の業蹟は天平行基の再來とみて異議はない。行基は文殊の應現と傳えられたが、重源も又彌陀の化身と呼ばれた。愚管抄に

大方東大寺の俊乘房は阿彌陀の化身と云ふこと出きて、わが身の名をば、南無阿彌陀佛と名とりて、万の上に一字おきて、空阿彌陀佛、法あみだ佛など云名を付けるを、誠にやがて我名にしたる尼法師おほかり。

と慈圓は尊信している。又行基の五台山物語に比すべく、重源には阿育王山傳說さえ傳えられている。吾妻鏡による

と、重源は建保四年、鎌倉に下向し、將軍實朝に謁し、實朝が前生に阿育王山の長老であつた時、陳和卿はその門に列した因緣を語つたが、實朝の夢想にも合するというので、渡宋の計畫を立て、陳和卿に大船の建造を命じ、曲比ケ濱に船を浮べたが、出港不成功に終つたことがある。陳和卿は意志の強い個性ある宋人、その指導の下に集つた宋朝工人と我が工人との折合はあまり良くなかつたが、三度まで入宋した重源の取持で東大寺再建が大した障害もなく運んだ。

又東大寺勸進所安置の快慶作僧形八幡像も、重源の勸進によつて成つたもの。建仁元年十二月廿七日、開眼供養を遂げたのである。胎內墨書の銘に依ると、結緣の人々は、上は貴顯より下は尼女房に至るまで、多くの人々が擧げられているが、中でも善阿彌陀佛、眞阿彌陀佛、空阿彌陀佛の如く、阿彌陀佛名を附する人の多いのは、恐らく重源の門弟であらう。重源の衆と共に法味を愛樂したゆかしい一面を、こゝにも見出すのである。

天平行基が西方願生者であつたことは、日本往生極樂記に、第二位に行基を擧げていることによつて云いうるが、重源との相通ずるところを窺い知る。

かくの如く、日本佛敎史上、行基、重源の一線に、庶民性の濃厚な色彩を見出すことができる。彼等は庶民的文化に貢献した相通ずる一脈、――政治的でなく宗敎的な、共通の地盤に立つて共通の敎化に一生を捧げたのである。